

日本英学史学会中国・四国支部

平成 27 年度 第 2 回（通算第 73 回）研究例会（福山研究例会）プログラム

日時： 2015 年 12 月 12 日（土） 13:30 受付開始

会場： 学校法人 福山大学 宮地茂記念館

〒720-0061 広島県福山市丸之内 1-2-40 TEL : 084-932-6300

(JR 福山駅北口より徒歩 2 分, 「ベッセルイン福山駅北口」東隣)

開会行事 (14:00-14:10) 支部長挨拶

講演 (14:10-15:20)

「歴史研究と ICT 技術の交わり—英語教育史研究のひとつの姿—」

小篠 敏明 (福山平成大学)

ある古墳で錆びた鉄製の刀剣が発掘される。しかし、この刀剣は古墳の湿度に長期間さらされていたため、ぼろぼろに錆びていて、どうにもならない。資料的価値は皆無。少なくともはじめはそう見られていた。ところがこの刀剣にレントゲン線を当ててみると文字が鮮やかに浮かび上がってきたではないか。この文字によりこれまでわからなかった多くの歴史的事実が浮かびあがってきた—。これは歴史研究と先端技術の交わりを示すひとつのエピソードである。最近の私の研究はこれには毛頭及ばないが、少なくともこの方向を目指していることだけは確かである。

自分たちの力で自分たちにあった自分たちのための教科書の英文難易度（リーダビリティ）測定ツールを作り出す。自分たちの感覚に合った「物差し」を作り出す。そしてその物差しで教科書英文の難易度を測定し、比べることができたら、どれ程わかりやすいだろう。このような問題意識から、新しいリーダビリティ指標開発に取り組んできた。そして今や Ver. 3.4.2nhnc1-5 の開発まで進めることができた。

この度、新たな共同研究組織を立ち上げ、歴史教科書英文の難易度を自作ツールで測定し、歴史資料に ICT の光を当てる研究を始めた。とりあえず、Union R, National R, Dening R 等、9 種類の教科書のリーダビリティ分析から初めた。

この研究はまだ緒に就いたばかりであるが、可能性に満ちていると感じている。当日は私たちの一番ホットな研究についてひとつの話題提供ができればと思っている。

研究発表 (15:30-16:40)

「新制高等学校発足期の入学者選抜における英語の位置付けについて：高知県を例に」

河村 和也 (東京電機大学)

新制高等学校の発足期、入学者選抜における学力検査の扱いが都道府県ごとに異なっていたことは周知の事実である。中でも、中学校で選択科目とされた英語の位置付けは特にさまざまであった。高知県では、この時代に公立高等学校への「全入制」を実施しており、学力試験としてのアチーブメント・テストや入学者選抜の資料としての学力検査について、その功罪が喧しく議論されていた。この発表では、その過程で英語がどのような位置を占めたのかを探ってみたい。

閉会行事 (16:45-17:00)

副支部長挨拶、 写真撮影

懇親忘年会 (17:30-19:30) (福山駅周辺の会場を予定、会費 5,000 円程度)